



# 「中華」からの離脱始まる

香港・台湾の新潮流

## 連帯とアイデンティティ求める

この春以来の一连のSARS禍、中国の新しい指導体制、そして北朝鮮をめぐる様々な国际関係などにアジアのニユースの焦点が集まるなかで、同じアジアには歴史の深部の潮流に根差す大きな変化のうねりが起こりつつある。それは、東アジア世界が従来の国家的・権力的統治の枠組みとは異なった次元で、新しい時代のアイデンティティを模索しつつ、広く民衆レベルで胎動しはじめている動きである。

7月1日の香港の国家保安立法反対デモ。主催者によると、参加者は50万人を超えた。董建華行政長官の辞職を求める文字も見える=AP



その第一は、香港の国家保安立法の案件が香港市民の抵抗で延期されたこと、二つは香港人と台湾人が初めて連帯して同じ席に着き、「一国両制」下の香港と台湾の将来を熱烈に論じはじめたこと、そして三つ目は中華世界を離脱して名実ともに台湾になるための運動（「正名

運動」)が本格的に始まつたことである。

# 中嶋 嶺雄



北九州市立大  
大学院教授  
(国際社会学)

「われらは多くの市民が政治的な意見を表示したのは、画期的なことであった。

従来、香港人は政治的意識が必ずしも成熟せず、台湾にたいしては冷たい視線を持ち、一方の台湾人は香港社会を別個の中華世界とみなして違和感をもつていた。広東語の世界と台湾語

制によっても覆すことのできた  
い歴史の流れである。

このようないくつかの事象は、  
この東アジア世界の基  
底の新しい潮流をしつかり見据  
えてゆくことが、差し迫つての  
重要課題だといえよう。

私がここで具体的に示すのは、いざれもこの夏以来の出来事であり、東アジア世界の将来に大きな影響を、時がたつにつれてじわじわと社会の内側からもたらすものと思われる。

この春以来の一连のSARS禍、中国の新しい指導体制、そして北朝鮮をめぐる様々な国际関係などにアジアのニュースの焦点が集まるなかで、同じアジアには歴史の深部の潮流に根差す大きな変化のうねりが起りつつある。それは、東アジア世界が従来の国家的・権力的統治の枠組みとは異なった次元で、新しい時代のアイデンティティを模索しつつ、広く民衆レベルで胎動しはじめている動きである。

に組織した急進的民主党派「前線」の劉慧卿女史（立法議員）ら二十名の香港代表は、去る八月十六、十七の両日、李登輝・前台湾総統自ら討議に加わった「一国両制下の香港」と題する国際討論会に出席し、七百名に近い台湾の人士と熱烈討論を行なった。この討論は、

(閩南語)の世界の違いもあって、両者が共通言語の北京語を用いてこのように連帯することなどなかったのだが、今回は香港の民主派が台湾の民主派・「独立」派と強く手を携えたのであった。

なかじま・みねお 36年生まれ。東京大大学院修了。前東京外大学長。著書に『北京烈烈』(サントリーアート賞、筑摩書房)、『中国・台湾・香港』(PHP研究所)など。